

## 女放蕩者のなりゆき

玉 崎 紀 子

本論ではアフラ・ベーン (Aphra Behn) の小説『美しき浮気女』(*The Fair Jilt*) をとりあげ、英文学の女性像の一般的イメージとあまりにもかけ離れたヒロインの実像に迫ってみたい。王政復古期からの放蕩文化における女・放蕩者とでも呼べるヒロインが、無神論的な俗世主義と物質主義の社会と文化を体現していること、そしてこの特異な作品がいわゆる「小説の勃興」以前の時代に小説の先駆となっていることを指摘したい。

### 1.

18世紀風俗を写していることで有名なホガース (William Hogarth) の「放蕩者のなりゆき」(*The Rake's Progress*, 1733) の絵は、『天路歷程』(*The Pilgrim's Progress*, 1678) を基にして 'progress' という語が使われるが、主人公は巡礼のクリスチャンではない。遺産によって突然放蕩社会に放り込まれた若者が、だんだん放蕩に染まり墮落していくさまから、俗世主義の放蕩文化を諷刺し、行先は地獄だと放蕩を非難する宗教的心情が根底にある。これは1733年発表という年代からプロテスタントとして悔い改めを真剣に受け取る北方的思想を表していると考えられる。この絵で非難される王政復古期からの放蕩文化は、イギリス文化の歴史では例外的に、開放的でラテン的な放蕩者の生き方を称揚する<sup>(1)</sup>。それは快楽を追い求める物質主義者をよしとし、世俗的生命力にあふれる放蕩者の、イタリア・ルネサンスを受け継ぐフランス宮廷経由の文化である。

放蕩者の原型「ドン・ファン」は反宗教改革の時代にスペインの修道僧

ティルソ・デ・モリーナによって伝説を基に書かれた『セビリヤの色事師と石の招客』<sup>(2)</sup> (1620年頃成立) という芝居で、17世紀始めにはイタリア即興喜劇(コメディア・デラルテ)として人気を得てヨーロッパ各地で巡業公演されていた。これを受け継いだモリエールの『ドン・ジュアン』(1665年作)を経由してラテン文化の放蕩好みは、王政復古のイギリス宮廷に入ってきた。時代は下るがモーツァルトの歌劇では、この伝説的『セビリヤの色事師』をモデルに、自ら放蕩のイタリア人だったダ・ポンテによって、地獄に堕ちる最後まで後悔することなく放蕩を楽しむ『ドン・ジョヴァンニ』(1787年)が描かれ、ラテン的伝統が端的に表されている。モーツァルト研究者アッティラ・チャンパイによれば、ドン・ジョヴァンニを性欲の猛者、女性を破滅させる人物として見る市民階級的視点は間違いで、実はこの放蕩者は神の威光も無視し、絶えず新たな女性との抱擁を求め、大胆不敵で勇気あり、魅惑的な気質と尽きることのない活力にみちた若い騎士であった<sup>(3)</sup>。またティルソの原型ドン・ファンも自分の若さから死を恐れず、現世の放蕩を追い求め、高貴の身分で美貌、豪勇に恵まれ放蕩の悪事の故に放浪の身である。それ故空位時代のチャールズ2世を想起させる放蕩者ドン・ファンの特質を宮廷が称揚することになった。さらに放蕩に耽けり禁忌を犯すものの、石の招客に象徴される永遠の秩序、普遍的倫理、神の偉大さを否定するために命を賭けたドン・ファン<sup>(4)</sup>を放蕩文化は英雄視する。こうして放蕩者の特質が王政復古期イギリスで理想となったのである。

王政復古については、清教徒革命後のクロムウェル治世下とは全く相反して放蕩が賛美された宮廷文化が有名だが、チャールズ2世は王座につくために国民の新教信仰を認めて、イギリス王に迎えられた。国民議会は何より新教徒信仰を選び、次に王を選んだのであって、王権神授説など問題外であった。従って、議会が気にいらなければ王は変えられるという暗黙の了解があった<sup>(5)</sup>。いきおい宮廷はいつ変わるか分からない政体故に、刹那主義となり物質主義がはびこった。この潮流にあって王政復古期は、世俗主義でエロティックなドン・ファンの特質をもつチャールズ2世のもとに宮廷が追従し、人々はこの世での快樂の追求へ進んだ<sup>(6)</sup>。今や個人的快

楽をこの世で求めなければという気風が満ちていた。しかし一方では、この放蕩文化に対立し、正反対の清教徒文化も流れていたことを忘れてはならない。すなわち快樂主義の王政復古文化には、自己追求の清教徒精神が混在し、清教徒の信仰を守ろうとする思索的な潮流の影響もまた存在していたのだ<sup>(7)</sup>。

しかし個人の自由尊重の清教徒主義は、他人には自由を認めず、他人を詮索し他人の罪を疑い真理の道からはずれた人を抑えこもうとし抑圧的であった<sup>(8)</sup>。そこで共和制後は強い反動が起こり、王政復古の寛容と自由な気風が庶民に喜ばれた。たとえカトリックよりであろうと気さくな王は、清教徒時代の道徳的神学や禁欲的習慣よりましと思った庶民は、活気あり明るいロンドンを喜んだ。一方、性の自由を謳歌する放蕩文化のもとで、上層階級は性を生殖のためではなく快樂のために使うセンシュアリティをおおっぴらに認め始める。これはエロティシズムが結婚関係にまた結婚外の関係に含まれることを認識するという変化をもたらす。それまでは理論上も実行も、性愛エロティシズムは婚外に限定されていたのが、大きな転換を迎えたのである<sup>(9)</sup>。聖なる結婚を掲げる新教徒は結婚における愛情関係を重視し、結婚を確立するものとして性愛の重要性を認識するようになったが、恋愛結婚なしの上層階級は宮廷に倣い快樂主義へ、婚外の放蕩に向かうことになった。

## 2.

王政復古期から1730年代までの放蕩文化のもと、女性作家による恋愛、結婚、放蕩が主題となっている小説が最も人気を得ていた。放蕩の小説を書く女性作家達はスチュワート王朝に忠誠な王党派であり、王政復古期の遊蕩文化を好み、チャールズ2世の死後、カトリックのジェームズ2世の王位剥奪を非難しジェームズ王派（Jacobites）と呼ばれる王党派の大義を信念とする。従って政治的には王党派、宗教的にはカトリックそしてこれらを背景にする貴族的文化が、ここに取り上げるベーンの小説を読み解く鍵と言える。ただし、宗教的にカトリックといっても当時の平均的市民

として当然イギリス国教会信徒であったベーンは、王党派故に心情的にカトリック「的」であったというにすぎない。彼女はその意味で、カトリックの王家に倣いカトリックの祭礼を好み、カトリックのヒロインや放蕩者を描いた<sup>(10)</sup>。18世紀以降確立した小説は宗教的にプロテスタント、政治的には新興中産階級の信奉するホイッグ派で、市民文化を背景に中流的日常家庭を描くので、放蕩の小説は全く対照的である。

ここで取り扱うヒロインは放蕩文化の中で自由に恋愛を楽しむ女性でそれ以前にも、この時代以降にも見られない存在である。財産に基づく政略結婚が普通の17世紀でも実は恋愛結婚した貴族の例はあるのだが、17世紀上流社会は恋愛による結婚を絵空事のロマンスと見なし自由恋愛や恋愛結婚を認めず、むしろそれを罪とみなした。王政復古以降、花嫁の意向を無視してはいけないという意識が段々と高まっていくのだが、それでも女性の意志は全く考慮されず、親に強制された結婚が上層階級では普通であった。まれに恋愛結婚し幸福な結婚生活をおくったとしても、恋愛結婚した当事者達が常に死ぬまで親に対する義務に反したと罪の意識をもち続けた。その例は、アントニア・フレイザー (Antonia Fraser) のドキュメンタリー的歴史書『より弱き器』(*The Weaker Vessel*) に多々述べられる<sup>(11)</sup>。またこの後18世紀には男性の放蕩文化は続いても、女性には純潔、慎み深さ、感傷的弱さが押しつけられ、それが美德として定着し、ヴィクトリア朝小説の抑圧された女性像へと続いていく。この間にあって王政復古の放蕩文化で女性が例外的に自己主張し、恋を楽しむことができたのはなぜか考えてみたい。

当然、最大の理由として共和国の怠惰を憎み、労働を聖化する生真面目な清教徒文化と正反対の、遊蕩を人生と見なすラテン的気楽で自由な気風が、女性にも開放的な態度を許したからと言える。しかも自己追求の清教徒精神からきた個人の自由尊重に基づく王政復古は、女性にも自由をという主張を生んだのである。王党派の女性思想家メアリ・アステル (Mary Astell) は『結婚についての考察』(*Some Reflections upon Marriage*, 1700) で、「王政復古以来、国王に絶対王権が必要なく男性が自由だというのなら、女性はどうして生まれつき奴隷として男性に服従しなければな

らないのか」（1700年）と疑問を呈する<sup>(12)</sup>。また清教徒戦争の間強い意志と行動力を発揮し城を守って戦った女性達はその後も自己を守ることに自信をもったと考えられる<sup>(13)</sup>。

さらに王党派とは逆の立場からだが、清教徒の革新思想がある。クリストファー・ヒル（Christopher Hill）の『法に逆らっての自由』（*Liberty against the Law*）<sup>(14)</sup>によると、革命時代には国家権威にたいする反抗と急進的思想から性的自由と結婚についての論議が盛んだったので、女性にも影響を与え、急進的な思想をベーンは知っていたと言う。

次に王政復古後度重なる政変により、さらにはペスト流行とロンドン大火の天災にも見舞われ、明日をも知れぬ運命に、王を含めて宮廷貴族達は日和見と妥協の連続で刹那主義、物質主義へ傾いたのは当然である。個人の幸福の追求が理想となり、ベーンはジェームズ王が進めるカトリック政策が寛容を主張する故に支持した。また放蕩文化の理論的根拠である「万物は滅び原子に帰る、来世の生命はなく現世の生活を楽しむべき」というルクレチウスの哲学をベーンは好んだとジャネット・トッド（Janet Todd）は述べる<sup>(15)</sup>。そこで社交界では、王党派により放蕩の称揚がなされ、その趣旨で書物が多く書かれた。放蕩の弁明として『旧約聖書』の一夫多妻により子孫を増やしたイスラエルの祖の例をあげ、一夫多妻が神の意思という主張が放蕩文化の中で盛んに行われた。この思潮が放蕩文化に勢いを与えたといえる<sup>(16)</sup>。

またチャールズ1世王妃ヘンリエッタ・マライアがイギリスに持ちこんだ、プラトニックなフランス流恋愛が尊重する恋の作法、ギャラントリー（gallantry）<sup>(17)</sup>がある。非常に優れている魂は身体、衣装にも顕れるとする王妃のとりまきは、恋する男に必要な雅な外見や宮廷風恋愛の手続きをギャラントリー（女性に対する懇懃な言葉や行為を賞賛する雅に対する好み）として騒ぎ立てた<sup>(18)</sup>。王政復古期において、放蕩者がこのギャラントリーにのっとり求愛する時、放蕩文化が女性に受け入れやすいものに変容したのだと明らかである。放蕩者がギャラント（gallantryを備えた恋人）として様々な恋の儀礼に従い、女性を尊重し雅な言葉を用いる時、浮気でも賛美された。伊達男としての服装に心くだき機知ある会話によって

女性を祭り上げ快楽を手にいれることができれば放蕩者は賞賛された<sup>(19)</sup>。このフランス流恋愛とギャラントリーは、17世紀初めにフランスで盛んになった社交サロンを反映している。サロンでは愛は人間形成の場となり、女性は快楽の対象ではなく、その心を魅了すべき対象になった<sup>(20)</sup>。放蕩文化の中で生きる女性が放蕩者（ギャラント）を一方では外見ばかりの洒落者（fop）と心中嘲笑しながらも、一方ではその生气あふれる機知と女性尊重を好むことになったのである。前述したように貴族階級では恋愛結婚も認められず、強制された結婚の故に、結婚後は洗練とギャラントリーの誘惑にまけやすい女性が多くなる。こうして宮廷風恋愛の儀礼から発生したものの、王政復古期のギャラントリーが、女性に放蕩を受け入れやすいものに変えたのである。そして女性自らも放蕩を好む女・放蕩者となる。

### 3.

女・放蕩者は、男性放蕩者の飲酒の悪癖はなく賭博もめったにせず、放蕩者を理想の相手とし専ら性的放蕩に関わることになる。アフラ・ベーン（Aphra Behn）の『美しき浮気女；またはターキン王子とミランダの物語』（*The Fair Jilt; or the History of Prince Tarquin and Miranda*, 1688）<sup>(21)</sup>のヒロイン、ミランダは、結婚しても夫に縛られず、自分の欲望を追い求め、王女としての栄光に生きたいと望み、その欲望の実現を求めた女性である。

ミランダはアントワープの修道院育ちのおそらく土地柄から大貿易商人の娘である。莫大な財産の女相続人で、その上美貌なので多くの求愛者が押し寄せるが、非常に多情で浮気なのでどうしても一人に決められない。原題 *The Fair Jilt* の ‘jilt’（浮気女）という英語は放蕩者の女性形と言える。ベーンにとって、修道院育ちは自然な欲望を信心深さによって抑えつけられたために悪事に走るという結末を暗示する<sup>(22)</sup>。

彼女は浮気女というばかりでなく悪女なので、当時スペインから入って来た流行のピカレスク・ノベルの魅力的な犯罪人の系譜<sup>(23)</sup>とも見えるのだが、むしろ愛の物語だと作者は語る。すなわち、次のように、ベーンは

愛の力を賛美する。「愛が魂の最も高貴で神々しい情熱であるように、人生の全ての現実的満足は愛に由来するとするのは正当である。愛がなければ人間は未完成で不幸である」（29）。また「恋の目的は美德であり、名誉であるので、人間の性質を変える力を持ち、歴史上の全ての英雄的行動を可能にしたのは、その洗練され輝かしい恋の情熱なのである」（30）。このように愛の力を称揚するベーンは、ミランダの話はその偉大な愛の力を語った物語だと言う。そしてミランダに対する熱烈な愛のために様々な危険と苦難に耐えたターキン王子の偉大な愛が賞賛される。

実は後代に大きな影響を与えた「英雄ロマンス」（Heroic Romance）と呼ばれる分野が17世紀フランスにあり、17-8世紀のイギリスで盛んに愛読された。代表的作者としてフランスの女性作家、スキュデリ嬢（Mademoiselle Madeline de Scudery, 1607-1701）が有名である<sup>(24)</sup>。この「英雄ロマンス」に夢中な『女キホーテ』（*The Female Quixote*, 1752）のヒロイン、アラベラ（Arabella）が恋人に要求する作法により、「英雄ロマンス」の恋の理想を知ることができる。マッカーシ（B. G. MacCarthy）<sup>(25)</sup>によれば、「英雄ロマンス」とは古代ローマなどを舞台にした歴史ロマンスで、ヒーローの勇士はすばらしい女神（恋人の女性是人並みはずれた美貌と高貴な性質により女神と崇められる）に対する愛の奴隷となる。強姦、誘拐、殺人も全て聖なる愛の炎のためになされたのなら犯罪ではない。全てが信じられないような出来事の連続という意味で空想的なロマンスである。愛の神は恋人の全ての冒険（悪事さえも）を正当化し、彼の愛に報いてくれると考える。従ってこの短編は「英雄ロマンス」の型に従い、偉大な愛に殉じたターキン王子は犯罪の場所アントワープから田舎に隠退しミランダと幸福に暮らすと、愛が報いられた幸福な結末で終わる。

『美しき浮気女』は短編なのに、弟殺人未遂、レイプ、裁判、死刑、妹殺人未遂といった多彩な事件の連続において前述のロマンスそのもので、スモレット、サッカレイやディケンズへと続くピカレスクの伝統にも連なる。国王反逆事件に関係したトーマス・ダンガーフィールド（Thomas Dangerfield）の自叙伝として発表された『ドン・トマソ』（*Don*

Thomazo) は、イギリス 17 世紀のピカレスク・ロマンスとされている。『美しき浮気女』はこの喜劇的冒険物語を受け継ぎ、18 世紀ピカレスク・ヒロインへの伝統を作ったと言える。デフォアの『モル・フランダース』(*Moll Flanders*, 1722) や『ロクサーナ』(*Roxana*, 1724) はこの王政復古時代の悪女に倣ったものである。ミランダの話の中で最も信じられない出来事、つまりターキン王子の失敗に終わった斬首刑は、歴史的事実で当時の新聞に残り、ベーンは目撃したと語り、それ故この作品を「事実の話」(*History*) と分類している<sup>(26)</sup>。この時、処刑人はオノを振り下ろしたのに、オノは王子の首でなく下肩甲骨に当たり、首が繋がっていてターキンは生き返った。ベーンの小説にはこのように「私」という語り手が事件の目撃を主張する。これは、物語が途方もないロマンスではなく事実や小説なのだという主張である。ピカレスク・ロマンスや英雄ロマンスの要素を濃厚にもっていても、彼女自身も「小説」と題し、人物の衣装や、食事など当時の日常的現実的生活を小説的に描写する。これは、実人生の枷もなく社会的背景もなく、単に高貴な王女と王子の恋人故に主人公として語られるというロマンスと異なる。

この小説は、男性に劣らず放蕩を楽しむ悪女を描き、放蕩文化を賞賛するようである。実は女性と男性の性別役割の逆転に作者ベーンの性の二重基準に対する批判が現れ、裏返しにしたフェミニストの小説と読み直すことができる。すなわち、ミランダは美貌のフランシスコ修道士(元ヘンリーク王子)に一目惚れした時、数多くの恋文を送り宝石を贈り物にし、さらに財産を約束し彼に求愛して伝統的な男性の役割を演じる。彼が拒絶するとレイプと訴え彼を死刑においやり、男性のように復讐する。次の恋人、ターキン王子には、ローマ王の末裔という彼の身分と伊達男の評判を聞いただけで、恋心を抱き、彼の陵辱したルクレチアになりたいと恋文を書き<sup>(27)</sup>、教会に来る彼に見える席に美々しく装った彼女の姿を見せて誘惑する。性的欲望から誘惑する彼女のセクシュアリティは、男性の示す攻撃的性愛のパロディである。また彼女が恋するのは、いずれも王子であることが重要で、王子という支配者の権力と栄光に憧れる彼女を明らかにする。誘惑するための美しい装いは、当時の放蕩者と同じく、単に装う事それ自



体が目的ではなく、性的誘惑のために着飾るのだ。放蕩者が恋におちると男性的武術などの趣味を棄て、化粧、服装に心を砕くギャラント<sup>(28)</sup>に変わるのが当時の慣例だった。ミランダのお洒落は、洒落者（fop）になりギャラントの儀礼、放蕩者の策略を用いれば女を口説き落とせるという当時の男性がもつ信条のパロディを暗示する。

ミランダは結婚するや王子王女の結婚生活にふさわしく華やかな生活を始める。叔父のもとにいた彼女の妹、アルチディアナ（Alcidiana）も、叔父の死後、ターキン王子の被後見人となり一緒に暮らし始める。あまりの贅沢により王子の財産も自分の財産も使い果たし、共同相続人の妹の財産を使いだす。ところが、年頃になった妹が相思相愛の恋人と結婚したいと持参金を要求する。妹を黙らせることができないと知ると、小姓を色仕掛けで誑かし、妹を殺すように仕向ける。しかしこれは毒殺未遂に終り小姓は絞首刑。持参金を返さない限り借金牢獄を免れない運命と知り、ターキン王子に全ての苦難は妹から始まったと言い、妹が生きている限り生きていられないと訴え、王子が妹を殺すと言うまで泣きの演技を止めない。オペラ観劇のため馬車を降りた妹を、暗闇で狙い撃ったターキンは、殺人未遂におわり斬首刑に決まる。ミランダ自身は国外追放の判決をうけ牢獄に入る。恩赦により国外追放に減じられたターキンは、オランダ貿易商人の父に迎えられる。彼は父の遺産を受け継ぎ、田舎に住む私有財産をもつ紳士としてミランダと共に隠遁しオランダで平穏に暮らすと物語は終わる。このように悪女ミランダが何の詩的正義もうけず、結末では勝利する。これは、愛する妻のためにかくも大きな犠牲を払ったターキン王子の偉大な愛を称える物語なのだからとベーンは示しているのである。

しかし美しき浮気女、ミランダから言えば、栄華を求めた数々の悪行にもかかわらず、ただ盲目的に愛してくれる人を得たために、幸福な結末をえた話と言える。愛の偉大さは、ミランダのために処刑される間際にも（しかも彼女が悪事を懺悔した後なのに）、なお愛するミランダのために死ねて幸福というターキンに具体化されている。

そしてこれまで聞いたこともないような淫らさと彼女の懺悔した

悪事にもかかわらず、王子は相変わらず王女を熱愛していた。というのは最初の時彼を魅惑し、熱愛させたあの魅力を、彼女はまでもっていたからだった。彼女に会わなかったらよかったのにと願う気持ちに心変わりすることなど、最後の瞬間までありえなかった。それどころか、枷をはめられながらも、いたずらに誇り高い男のように、この短い人生が彼に与えた満足は、せめても彼の崇拜するミランダに仕えて死ぬことだけだと彼は言ったのだった。(67)

彼女の悪事にもかかわらず、恋慕の気持ちが変わらないと聞くと、騙されてもここまで愛することができれば本望だろうと驚き、熱愛に感心するものの、騙されて馬鹿な男と思わざるをえない。しかしこういう熱愛を示すのが多情な放蕩者の特質として賛美された。同様のもっと悲劇的人物として『ある貴族とその妹の恋文』(*Love Letters between a Nobleman and his Sister*, 1687)<sup>(29)</sup>のシルヴィア (Silvia) に裏切られたオクタヴィオ (Octavio) がいる。駆落ちした相手のフィランダー (Philander) に浮気され、手持不如意になったシルヴィアは男装の彼女に一目惚れし熱愛するオクタヴィオを誑かし、金をまきあげる。とうとう莫大な財産も、政治家の職業も、王家の血筋の社会的立場も、全て失ってしまい、彼はシルヴィアに捨てられる。その後で、オクタヴィオは、美しい彼女が彼を利用したにすぎないと知って世に絶望し、トラピスト修道院に入る。すると彼女は、好きだからではなく財産 (fortune) のために (372) 俗世に戻ってと懇願する恋文を書く。しかしオクタヴィオは「彼女をこれからは天国的な存在と考えましょう。だが彼女が生活の必要から悪い不実な男に身を売ることにならないよう彼女を危険から救いたいと思い、彼女が俗世を去り修道院に入ることを願ったのです (378)」とあくまでも彼女の精神的幸福を考える。いよいよ彼の修道院での俗世を捨てる儀式の前に、真面目な生活をするという彼女の約束を信じ、彼女のため伯母に預けてある財産から、彼女が一生楽に暮らせるだけの金額を贈る (414)。しかし彼女は、金を受け取るとすぐに豪華な馬車、衣装、宝石を買い、街で散歩し、見せびらかすのに遣ってしまうのである。これは美しき浮気女のどこまでも男を誑かす魅

力と、それに破滅してまでも誠実な愛を示す男という構図を補強するものである。

娘から妻になって財産の権利を失うのが17世紀女性の常であったのに、それどころか、『美しき浮気女』のミランダは財産のもつ力を最大限に利用する。娘の時は持参金ある美女として多くの求愛者に囲まれ恋の戯れを楽しみ、妻となっても彼女を熱愛するターキンの財産を利用し尽くしながら、貴賤相手を問わず情事に耽る<sup>(30)</sup>。前述のように彼女のために殺人を犯すほどに愛しているターキン王子に対しても財産がなくなると、彼女の愛はさめたと描写され、ミランダは自己愛から彼に妹の殺人を唆す。財産がなければ王女としての栄耀栄華が望めないからだ。

今では王子の彼を愛したほどには、彼女はターキンを情熱的に恋していなかった。彼自身よりも彼の王子の称号や栄光の方をむしろ好んでいたのも、この大いなる金額の支払いを避けて、支払いが妨害されないなら、栄光の完全な破滅だと予測した。そしてそれはアルチディアナの死によって以外には避けることができなかった。そこで絶え間なしにさめざめと涙を流し、「アルチディアナが死なない限り、私は生きていられないわ」と泣いた（60-1）。

「私の恥辱は全て妹のせい」（61）などと詭弁なのだが彼女に魅惑され魔力にかかっている彼は、「彼女に生きて貰うためなら妹を亡き者にしよう」と彼女を宥めるために言う（61）。

彼女の望むのは、単なる暮らしのための金ではなく、王子と王女の結婚の栄光を示すような贅沢である。結婚するや王女と名乗り、財産そのものよりも常に王子の身分にこだわっている。それはフランシスコ修道僧に恋した時にも、ドイツの小国の王子だったと聞いて、修道僧ではなく王子の腕に抱かれる夢を見たという個所に示される<sup>(31)</sup>。そしてミランダとの結婚生活で、王子のような生活を享受できる財産を失ったターキンは、彼女の望む恋人ではない。こうしてみると自己愛と権力愛が、彼女の本質である。それを可能にするものとして、富への欲望が強いのだ。また、彼女は

犠牲者の振りをして女性の専横をほしいままにする。欲望が叶えられないとレイプを訴え、思いが通らないと死の床に伏すという「弱き女性」の特権を最大限に利用し、それでいて男性放蕩者の行動通り浮気を楽しむという悪女と言える。このため全集では別題が「美しき偽善者、ターキン王子とミランダの愛」<sup>(32)</sup>と記されている。こういう彼女は欲望のまま贅沢と栄華にうつつをぬかす世俗主義の放蕩文化を体現している。多情と浮気も放蕩者の特質であるが、単なる多情だけでなく、ヘンリーク王子には復讐心から悪意を示し、ターキンの誠実な愛を悪用し、妹までも財産のために殺そうとする悪女である。

それなのに、この悪女が「魅力的な浮気女」(46)とか「このなだめ難しい美女」(49) また前述の「偽りのだが雪のように白く魅力的な腕」と描写され、彼女の美しさ、彼女の美しい装いが賞賛され、作者がヒロインを擁護していると読みとれる。殺人未遂の小姓やターキンにも作者の同情があり、とりわけターキンは美女の愛に殉じた立派な勇士として賞賛される。

一人ならず彼のために本当の悲しみと同情を感じた。彼がどんなに勇敢に戦ったか、何人もの男と戦い抜いたかを語り、彼の武勇と勇敢を褒め称えた。彼が捕まるよう手助けしたものさえ、今では後悔した。そんなにも立派な男の破滅に手をかしたのを後悔したのだ。まして相手の貴婦人は傷つかなかったのだから。(64)

この騎士的武勇と勇敢さは、ロマンスの英雄通りである。現代ではくだらない力自慢や虚栄と言えるが、男性支配の家父長制社会において賞賛すべき男性の特質であった。またチャールズ2世が多情で情熱的、愛妾達に気前よく贅沢させた特質から、王とターキンは同一視され賞賛されているのだ。

ミランダの物語は悪女や悪事への作者の同情的態度から、ジェンダー化された女性観を明らかにするために性を逆転した物語なのではという疑いが生じる。そこで性別を逆転させて考えると、当時の男性の常としてまず持参金によって結婚相手を決め(財産あるミランダは高貴の家柄の権力を

望み王子の身分にこだわる), 妻の財産を使い果たし, 結婚後浮気するのは放蕩者の夫の常である。家父長の権力で支配する夫の言うがまま, 殺人とは言わぬまでも気の進まぬことを無理強いされる妻は多い。それでいながら放蕩者の夫に盲目的に従い, 無償の愛を捧げるのが当然とされる。ベーンは王政復古期の男性・放蕩者のするままに行動し, 富や栄光を求めて生きる美しい浮気女, ミランダを描くことによって, 放蕩の社会を批判している。実は男性にだけ好都合な放蕩文化の行動を, 女性に実行させて, 男性批判と性の二重基準による女性の苦難を示している。すなわち, 女性にとっても結婚は束縛であり, 放蕩（不倫）しながら財産を確保できれば最高で, 男性の主張の一夫多妻ではなく一婦多夫でもよいと皮肉に示唆することになる。実は妻が不倫と判断された時には, いかに彼女が女相続人で多くの持参金をもち, 高額な寡婦年金の取り決めがあったとしても, 不倫した妻の財産は夫に奪われ全てを失うのが慣習であった<sup>(33)</sup>。もちろん男性は放蕩したとて財産は関係なく維持できる。そこで美しき浮気女, ミランダの生き方によって, 女性もこのように生きることができるのだ, しかもそれを楽しむミランダは悪女とされるが, 男性放蕩者なら許されているというフェミニスト的視点をベーンは逆説的に示していると言える。読者を嗤然とさせる女放蕩者を描き, いかに女性が愛の美名のもとに男性放蕩者のために苦難を強いられているかを明らかにしているのだ。

父権制社会において間違いなく自分の長男の跡継ぎを確保したいと思う男性の便宜のために, 結婚が制度化され, 女性の放蕩は拒否されてきた。ベーンは淫らな作品を書く下品な作家だと女性であるが故に非難されたりしながら, 男女の間の完全な平等を主張し, 作品でも父権制の規範が女性達に服従を強要していることを指摘する。例えば修道女は家父長制の戦術であった。「幸運な間違い」(‘The Lucky Mistake’) では長女しか嫁にやる経費をかけられないと尼にされてしまう妹が描かれ, 美人の姉を恋する隣家の息子が現れると姉も一時的に修道院に入れられたりする。また「尼または偽りの誓いをした美女」(‘The Nun, or the Perjured Beauty’) の話では恋敵同士が決着を付けるまで, 自分達の恋する娘アーデリア(Ardelia)を, 修道院に入れる。さらにベーンは結婚という制度が男性の

権威に依存し、男性の金銭的收入を目的とする以上、売春に等しいと考える。そこで妻という形で大多数の女性が従属している経済的束縛に非難をしている<sup>(34)</sup>。一方では自主権を行使しようと行動を起こす女性として、小説ではなく喜劇においてであるが、愛する人一人のものになりたいとジプシー女に変装する『遊歴者』(*The Rover*, 1677)のヘレナ(Helena)を描き、知的で自立した女性を理想とする。このようにベーンは作品で女性読者に自己を確立するよう説き、女性には家父長制度の規範と戦う権利があると教えようとしている。それ故強いられた結婚と父、兄弟、夫の監督下から自由になろうという女性が、多くの作品に現れる。

ところでトッドによれば、史実ではターキン王子のほうがミランダよりはるかに悪人で、冷酷な彼が妹を殺し財産を奪おうとしたとの事である<sup>(35)</sup>。すなわち事実から見直せば、ミランダは王子だと称する放蕩者の欺瞞に誘惑され、姉妹共に財産を奪われた犠牲者なのである。

ベーンの代表作、『ある貴族とその妹の恋文』のヒロイン、シルヴィアも同様に、この放蕩文化に応じて、セクシュアリティを利用し、恋愛関係において男性を操作する女性である。もちろん長編故に第1部では純情な若い娘の恋が描かれ、彼女のほうが放蕩文化における犠牲者であると明らかである。彼女はいくら義兄を恋したとしても性愛関係を主導したのではない。義理の兄妹の恋愛も近親相姦と禁じられていた<sup>(36)</sup>当時、王をも裏切るホウィッグ党のフィランダーに彼女は誘惑されたのである。王党派のベーンにとって、近親相姦関係はモンマス公が父に背き、次に叔父の国王に反乱したのと同じでホウィッグ派的<sup>(37)</sup>特性であり、王党派の娘シルヴィアは父から王から神から遠ざけられた犠牲者である。

一旦罪の関係に入った後、シルヴィアは純粹に義兄を愛し、彼の言うままオランダに駆け落ちする。しかし歴史的事実から言えば、彼のほうは国王に対する反逆罪のため囚われていたロンドン搭から脱獄した以上、国外逃亡しかなかったのである。愛が高まり駆け落ちというよりも、生命の危険から逃亡したにすぎない<sup>(38)</sup>。そこで到着して彼女が旅の疲れで病の床に伏すやすぐに、彼は浮気を始めるのだ。妊娠4ヶ月の彼女を捨て、厚顔にも自分は浮気で心変わりしやすいのが本性だと、フィランダーはオクタヴィ

オに手紙で告白する（171）。ここには女・放蕩者が犠牲者となる構図が明らかである。しかし第2部のシルヴィアとミランダは実に似ていて、男性を操作する悪女となる。外国での逃亡生活で、経済的に困窮した彼女は、彼女に恋する男性を利用し金をまきあげて生きていく。処女ではなくセックスが売れるものだ<sup>(39)</sup>と認識し利用する。元来ベーンは古代の牧歌時代のように、束縛なしに純粋な恋に生きることを賛美する。自然な当然の欲望に従うことができれば、女放蕩者は幸福だった。しかし欲望に従うのを妨害され、彼女達は犯罪を犯したのだとベーンは考える。そこで同時代のミランダとシルヴィアと同じくセクシュアリティに生きようとして「誓いを破った美しき尼」（‘The History of the Nun, or the Fair Vow-Breaker’, 1688）のイザベラ（Isabella）も悲劇に終わる。イザベラは、放蕩文化に合わせて生きることができなかった。なまじ尼の誓いのために信心深く一人の男との結婚を守ろうと考えたために、悪女として時代に合わせて生きた他の二人よりも、さらにおぞましい夫殺し（それも二人の夫）という犯罪を、彼女は犯すのだ<sup>(40)</sup>。

しかしこの悪女の罪はまず、現世を捨て聖なる生活をとるという誓いを破ったことにある。この誓いを破ったのは神に背き王に逆くことである。同じことは『ある貴族とその妹の恋文』に言える。シルヴィアの恋人フィランダーの国王に背き、先王の庶子を王位につけようという王を取り替える背信行為は、当然次々に女性を裏切り遍歴する彼の放蕩と結びつく。ジェイムズ2世こそ正当な王なのだというベーンの王党派の姿勢が、小説の核心となる。王党派とは関係ないと見えるミランダの物語も、高潔な騎士であるターキン王子が彼を誘惑した悪女によって、公開の場所で斬首刑を受けねばならない点で、チャールズ2世と結びつけられている。またこの物語は王位剥奪の後もジェイムズ2世の支持者だったヘンリー・ペイン（Henry Nevil Payne）に献呈されている。献呈は、「ローマ王朝の最後の王子」、「不幸な王子」、「苦難をうけた王は寛大なペイン氏のもとに逃げるしかない」、「もしこの物語の王子がより強くないとお考えなら愛の失敗の所為だと考えてください」<sup>(41)</sup>と言った言葉でターキン王子を語っている。これらの語句はそれぞれ明らかにジェイムズ2世を暗示しており、王座を

追放されたジェイムズ王に同情的なベーンの態度を示す。このように彼女の小説はプロパガンダと言っても良い程にスチュワート王家への忠誠が明らかである。

この王党派忠誠心を背景に、女放蕩者という形をかりて、『美しき浮気女』は女性の抑圧を訴えている。さらにロマンスの枠組を使いながら、女性性についての新しい見方や結婚の際の女性故にうける抑圧を示す。市民社会勃興と絡む金銭欲と恋愛という現実的な主題を、この『美しき浮気女』は17世紀後半という早い時期にすでに示し、小説の先駆となっているのである。

### 註

☆ 本稿は、1999年4月24日名古屋大学英文学会での口頭発表「女放蕩者のなりゆき」の原稿を加筆修正したものである。

(1) 放蕩文化は王政復古期に生まれた人まで入るので5-60年後1710年頃までで、アン女王時代はまだ王党派が宮廷で放蕩文化を続けていた。しかし清教徒の議会派が完全に王を飾り物にし市民政府を実施したジョージ1世時代に徐々に厳格な性道徳へ向かう変化を遂げた。1740年代以降性的放縦がたてまえ上許されなくなってきたので放蕩文化は1730年代迄と考えられる。

(2) 牛島信明『スペイン古典文学史』(名古屋大学出版会, 1997), 312-317.

(3) アッティラ・チャンパイ著・竹内ふみ子訳「モーツアルトの『ドン・ジョヴァンニ』における神話と歴史的瞬間」, アッティラ・チャンパイ & ディートマル・ホラント編『ドン・ジョヴァンニ』(東京:音楽の友社, 1981), 15 & 33. 原著出典: Attila Csampai & Dietmar Holland ed., *Don Giovanni*.

このイタリア的放蕩者の特質を明らかにする有名な「カタログの歌」は、ドン・ファンが征服した女性が多いこと、しかも誘惑が困難な国の女性ほど多いことから、彼が単に性を奪うのではなく、女性に魔力をかけるその前の段階にたけていること、それ故近づくのが難しい女にそれだけ惹きつけられる放蕩者だということを示すとチャンパイは言う。

(4) 牛島信明, 326-7.

(5) Mark Kishlansky, *A Monarchy Transformed: Britain 1603-1714* (Penguin, 1996), 221-6. Christopher Hill, *The World Turned Upside Down* (Penguin, 1991 edn), 348. 1660年には国会が王 Charles II を召集した。トーリーはこれをうけて1688-1714までに王権神授説を放棄する。



- (6) Lawrence Stone, *The Family, Sex and Marriage in England, 1500-1800* (Abridged Edition) (New York: Harper & Row, 1979), 159.  
 今や自分の運命を神の意思として静かに受容したり死後の報いの約束で安心した時代から変化し、自分の個人的快楽をこの世で現在今求めるのは自由と考える (Stone, 152)。
- (7) Lawrence Stone, 151.
- (8) Christopher Hill, 325-326. & Lawrence Stone, 152.
- (9) Lawrence Stone, 150.

市民階級から始まり核家族の夫と妻、親と子の間の愛情関係が重要になり結婚における性愛の重要性が意識されるようになっていく。

- (10) Janet Todd, *Secret Life of Aphra Behn* (Rutgers UP; New Brunswick, 1996), 368. トッドによると Behn 自身はカトリック信徒というより、共和国時代に清教徒によって祭壇や装飾を取り去られた陰気で禁欲的な教会は教会ではないと嫌ってカトリックの華やかな祭礼を好んだ (368)。

W. A. Speck, *Literature and Society in Eighteenth-Century England: Ideology, Politics and Culture, 1680-1820* (Longman, 1998), 17. W. A. Speck は、2 大政党の出現とされる 1680 年代には、カトリックは公職から追放されていたので Tory がカトリックというのは理論的にはありえないのだと述べる。しかし王党派以来、王権を主張するスチュワート王家に忠誠を誓う人々は、反対派の Whig 党がその王権を否定する故に清教徒、国民議会、そして共和国と結びつけられたので、カトリックと対立的にイメージされた。

- (11) Antonia Fraser, *The Weaker Vessel: Women's Lot in the Seventeenth-Century England* (Weidenfeld and Nicolson: London, 1984. 1993 edn.)

有名な貴族階級の恋愛結婚の例 (30-32)。Lettice Morrison は美貌だけでなく学問好きで男を誘う豊かな髪を避けようとする知性と教養で有名な娘だった。彼女を恋した Sir Lucius Cary (後の Viscount Faulkland) は父と争った末に 1630 年にこの一文なしの娘と結婚した。Lettice の例外的なすぐれた性格にも拘わらず同時代の人はこの結婚にあきれ、父に罪を犯したと言った。単に愛だけのために結婚とは信じられなかった。Faulkland 自身、父に背いたことを申し訳なく思い、祖父から譲られた財産を父に返すと言ったり、親に背いた罪を感じ墓碑銘に持参金で財産を増やしたという結婚ではなかったと書いたりした。内乱での夫の戦死に、Lettice は二度と打撃から立ち直れなかった。4 年間博愛的活動に専念し、悲しみに胸破れて亡くなった。他に heiress なのに身分違いの結婚のため財産を失い貧窮の身になった事実も述べられている。

- (12) Mary Astell, *Some Reflections upon Marriage* (1700), *First*

*Feminist: British Women Writers 1578-1799*. ed. Moira Ferguson. Bloomington: Indiana University Press, 1985, 190-197.

- (13) Antonia Fraser, 163-184. *Courage above her Sex* という章は清教徒戦争で夫と共にまたは女一人で指揮して砦をまもり戦った女性達の歴史。

- (14) Christopher Hill, *Liberty against the Law* (Penguin, 1996), 203. Hill は政治の上層からではなく、庶民や下層の動きから歴史を見る研究者なので、ここでも清教徒、中でも革新的な派に注目する。特に雑婚や乱交と言った性的自由を認める *Ranter* に注目し、ベーンはこの思想を知っていて、戯曲 *The Widow Ranter* を書いたと言う。

清教徒の結婚や性についての革新的議論の潮流の中でミルトンの「離婚論」が書かれたのだし、王政復古期は性に関して革新的だった。

- (15) Janet Todd, 'Notes' to *Oroonoko, The Rover and Other Works* (Penguin, 1992), 380. n. 1. Todd の註 (Note to 'To Mr. Creech, on the Excellent Translation of Lucretius') によれば、ルクレチウス (Lucretius c.94-55 B.C.) は「無神論は非難するが、死後に永遠の生命はなく、幸福は現世で得るべきである」という主張。これはまさに放蕩者の主張したもの。

- (16) 放蕩称揚の根拠としてドライデンの詩 'Absalom and Achitophel' (1681) (Martin Price ed., *The Restoration and the Eighteenth Century* (Oxford UP, 1973), 57.) がある。また Delariviere Manley の *The New Atalantis* (1709) の註釈者 Patricia Köster によれば、放蕩文化の中で男性の放蕩を許すための重婚が称揚され Jeremy Sandbrook, 5th Baronet 著の書物が評判だった。("he wrote the Defense of Polygames.", *The New Atalantis*, 288)

またこの作者名 Delariviere については Mary Delarivière を含め諸説あるが、フランス系の名前が英国化され最後の e がおち、ère のアクサンも落とされたとする Fidelis Morgan 説が Manley 研究者の間では標準になっており本論ではこの表記に従う。Patricia Köster (*Scholars Facsimiles & Reprints*, 1971), v-vi.

- (17) Antonia Fraser, 26-7.

- (18) Antonia Fraser, 26. Ben Jonson の戯曲 *The New Inn* (1629) に諷刺されている。

宮廷風恋愛は多数の召使い、すなわち神殿に礼拝したいと望むプラトニックな賛美者を望むだけと Ben Jonson は嘲笑し、宮廷風恋愛は王妃の宮廷と庶民の間に存在した隔たりを強調しただけと言う。

- (19) Todd, 19-29.

(20) クロード・デュロン「会話から創作へ」, G. デュピイ & M. ペロー編『女の歴史』Ⅲ・16-18世紀-2. (東京: 藤原書店, 1995), 594. 原著: *Histoire de Femmes en occident 3 XVe - XVIIIe siècle*, Natalie Zemon Davis et Arlette Farge, dir., (Paris: Plon, 1991). 以降, 本書からの論文引用は出典を『女の歴史』Ⅲと省略する。

(21) Aphra Behn, 'The Fair Jilt', *Oroonoko, The Rover and Other Works* (Penguin, 1992), 29. 以下引用はこの版により, 本文中に「」内の私訳の後括弧内の数字で頁数を示す。

(22) 短編『美しき浮気女』は, 「美しき浮気女」という表記が正しいが, 本論ではこの作品を中心に論ずるため, 目立つようにあえて『美しき浮気女』という括弧を使用した。

この悪女と修道院との関係を, 心は変わり易いということを受け入れない社会が, 信仰に束縛された修道院出身の娘により大きな罪を犯させたと Todd は言う。(Todd, *Secret Life of Aphra Behn*, 393)

(23) 悪人の系譜で英文学最初の例として Thomas Dangerfield 作の Don Thomazo (1680) がある。一方 Congreve 作の *Incognita* (1692) は小説と銘打つ愛の物語。出典: Thomas Dangerfield, 'Don Thomazo' (1680), Paul Zalzman (ed.), *An Anthology of Seventeenth-Century Fiction* (Oxford, 1991), 349-446.

Paul Zalzman によれば, 作者名不詳の *Lozarillo del Tormes* (1554) [会田由訳『ラサーリョ・デ・トルメスの生涯』(岩波文庫, 1998)] と Mateo Aleman 作 *Gusman de Alfarache* (1599) というスペインのピカレスクが, 大人気で翻訳され版を重ねた。Don Thomazo は身分良い家柄に生まれたのに, 持ち前の冒険好みから父の罰を受けるのを逃れて家を出奔し, 恋と冒険を世界中で続ける。Popish Plot でモンマス公のため偽金作りをし反乱を主導したとされ, 処刑された Dangerfield に同情して作品が書かれた (Zalzman, xii)。Dangerfield はカトリックの陰謀を暴露しようとしたのに, 彼の法廷での頼りない振舞と証言が Mrs Cellier に裏切られた (Mrs Cellier は物語の最後に現れる)。Don Thomazo は, 魅力的な悪者 Don Thomazo の人物像とアイロニ, 下品な喜劇があり, ピカロらしく教訓的な評言と恋の歓楽などの混合の物語。語りは魅力的で自己意識と教養が明らか。子供時代は特に巧い。Dangerfield はベーン作の短編, 'The Dumb Virgin' のヒーローの名前であり, 悪名高い名前を用いたことでベーンは本文では英雄と賞賛される Dangerfield の放蕩者の特質を暗示している。知らずとは言え近親相姦を犯し折りあらば女性の名誉を奪うのだから悪人なのだと示す。また歴史上の Dangerfield があちこちで傭兵も経験し, これがベーンの 'The Dumb Vir-

gin' のヴェニス海軍で志願兵として活躍したイギリス人 Dangerfield として語られることになる。つまりベーンでもモンマス公を助けるホイッグ派放蕩者という暗示がある。

(24) スキュデリ嬢の作品は数多く人気作家だった。彼女はモリエールの喜劇『才女気取り』のモデルとしても有名。

(25) B. G. MacCarthy, *The Female Pen: Women Writers and Novelists 1621-1818*. (Cork: Cork University Press, 1994), 139.

(26) 本文で To a great part of the main, I myself was an eye-witness. 30. と書かれるが、彼女の目撃は怪しくその事件のおりアントワープにいたはずはないので、イギリスにいて新聞雑誌などから知ったらしいと、Janet Todd は、*Secret Life of Aphra Behn* (111) で述べる。ベーンの短編小説 (Histories and Novels と題される) の中で事実を強調する各作品は History または Novel と呼ばれている。History と題されているのは [Jilt, Oroonoko, Agnes, Nun : Isabella, Nun ; Perjured Beauty, Unfortunate Happy, The Wandering Beauty] であり、[Lucky Mistake, King of Bantam, Black Lady, Dumb Virgin] は短編小説 (Novel) と題されている。Unhappy Mistake と Love letters はどちらの副題もない。翻訳と題したのは Agnes 一つだが、実は大半がフランスやスペインの話を翻案したもの。

(27) 古代ローマのルクレチアは貞淑な妻でターキン王子に陵辱された時夫に復讐させる。夫もターキン姓でこの事件のためターキン一族はローマから追放され、故にローマ最後の王族となる。従って夫と王子のターキンが存在するのだが、陵辱と言い王子にこだわるミランダからすれば、放蕩者で陵辱した王子を指す。そうなると会う前から恋しそれも性愛を望む、たとえ陵辱でもという女性にあるまじき、むしろ男性放蕩者を暗示する台詞である。

(28) Antonia Fraser, 427. ルパート王子が女優マーガレット・ヒューズ (Peg Hughes) を恋した時、彼は科学的趣味、錬金術、思索もすて、彼女を口説くため髪粉と香水に美々しく装う (427)。恋人はギャラントに変わるのが当時の慣例だったので、彼の変身と恋の作法に王が大喜びした (426-439)。Cf. サラ=F・マッシューズ=グリーコ「身体、外見、そして性」、『女の歴史』Ⅲ, 84.

(29) Aphra Behn, *Love Letters between A Nobleman and His Sister*, ed. Janet Todd (Penguin, 1993).

以降テキスト引用はこの版により、本文中では括弧内の頁数字で示す。

(30) 彼女は修道院の見習尼の時も結婚後でも、肉体関係を伴った情事をしている。...all her life, all the lewdness of her practices with several princes

and great men, besides her lusts with people who served her, and others in mean capacity. (原文 66)

- (31) ...in the bed, the silent gloomy night, and the soft embrace of her arms, he loses all the friar and assume all the prince; (原文 41) 夢の中の抱擁で修道僧の彼は姿を消し完全に王子となった。
- (32) 'The Fair Hypocrite; or the Amours of Prince Tarquin and Miranda' が全集の本文 1 頁目の題名。Aphra Behn, *The Pickering Masters: The Works of Aphra Behn*. Vol.3. *The Fair Jilt and Other Short Stories*. Ed. Janet Todd. Columbus, Ohio: Ohio State UP, 1992.
- (33) See Antonia Fraser, 24.& 275. 夫婦関係も不能で狂気の夫のため、Lady Purbeck の持参金を確保し一族のため維持しようとする夫の兄のバッキンガム公爵のせいで、不倫した彼女は莫大な女相続人なのに貧窮の身に。不倫を咎める実の父さえも援助しない (12-24)。
- (34) エリック A・ニコルソン「演劇——彼女たちのイメージ」, 『女の歴史』Ⅲ, 465 (経済的束縛への非難) & 464 (自立した女性を理想)。
- (35) Janet Todd, *Secret Life of Aphra Behn*, 112.  
Haywood の 'The Mercenary Lover' は夫が悪人で放蕩者の妻は Miranda, 毒殺される姉 (Behn では妹) は Althea と似た名前で、微妙な物語の違いが興味深い。
- (36) Janet Todd, "Introduction" to *Love-Letters between a Nobleman and his Sister* (Penguin, 1993), xi.
- (37) Ros Ballaster, *Seductive Forms: Women's Amatory Fiction from 1684-1740* (Oxford: Clarendon Press, 1992), 86.
- (38) Janet Todd, 'Note' to *Love Letters between A Nobleman and His Sister* (Penguin, 1993), 115 n. 1. 1683 年の Rye House Plot は国王ジェイムス 2 世を倒しモンマス公を王位に据えようとする国王への反乱であった。この反乱の首謀者であるグレイ卿は英国を逃れなければ危険であった。
- (39) Janet Todd, *The Sign of Angellica: Women, Writing and Fiction, 1660-1800* (New York: Columbia, 1989), 78.
- (40) Janet Todd, *Secret Life of Aphra Behn*, 393.
- (41) Aphra Behn, *The Works of Aphra Behn*, Vol.3., 4-5.